

マーケット概況（2022年7月）

7月の債券相場は、米国長期金利が3.0%を割り込んだことで10年366回債の利回りが0.220%に低下し、債券先物9月限は148円81銭に上昇して始まった。6月米国ISM製造業景況感指数が悪化すると、債券先物9月限は149円台まで買い進まれたが、インフレ警戒感から欧州債が下落したことで債券先物9月限は148円79銭まで売られ、入札前の調整も加わり新発10年367回債の利回りは0.250%まで上昇した。10年債入札を無難に通過したことや、新型コロナウイルス感染再拡大を背景としたリスクオフ地合いのなか債券相場は堅調に推移したが、安倍晋三元首相が銃撃されたと伝わると売りが優勢となった。6月米国雇用統計の結果が良好だったことや、参院選において自民党が勝利したことで上値が重く推移したが、日銀が金融政策決定会合で緩和姿勢の維持を決めると債券先物9月限は150円台を回復した。40年債入札が好調な結果となったことで債券相場は一段高となり、FOMC後の記者会見でパウエル議長が今後の利上げペース鈍化について言及したことも相まって高値圏で推移した。月末にかけては4～6月米国実質GDP速報値が市場予想を大きく下回ったことで債券先物9月限は上伸して150円61銭を付け、10年367回債は0.175%まで利回りが低下した。

<短国市場>

3M金利は、投資家需要により概ね-0.14%台～-0.15%台で推移した。月初入札の3MTDB1091回債は、最高落札利回りが-0.12%台となったが、22日の3MTDB1097回債入札では、内外投資家の玉確保ニーズが底堅く-0.14%台で応札が積み上がり、セカンダリー市場では-0.15%台半ばまで低下した。月末にかけては投資家需要が一服し、3MTDB1098回債は-0.143%で取引を終えた。6M・1Y入札は、ドル円ベースのマイナス幅拡大を背景に積極的な玉確保姿勢から前回債より低下し強めの結果となった。6Mは年末越え償還となることや発行額の減額も伴い、6MTDB1096回債はセカンダリー市場で-0.230%まで低下した。入札が-0.1308%の一本値の決着となった1YTDB1095回債は-0.180%まで低下し、最終的に-0.160%で取引を終えた。

<一般債市場>

10年地方債は前月比6.0bpワイド化し国債カーブ+12.0bp、5年地方債は前月比4.0bpワイド化し同+9.0bpで条件決定した。実勢を映し大幅にワイド化した投資家の警戒感により予約の入りはやや遅く、消化に時間を要するものもあった。既発債は、金利水準がボラタイルな動きの中で投資家の消極的な運用姿勢により、長期・超長期ゾーンのスプレッドのワイド化が意識された。社債は昨年と同様に三菱UFJフィナンシャルグループの個人向け債など大型発行もあり、月間発行額は1兆2,034億円と昨年同月並みだった。SDGs債関連では、日本電気と三菱地所がサステナビリティ・リンク・ボンドを、出光興産がトランジション・ボンドをそれぞれ発行体として初めて起債し投資需要を集めた。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#367	0.250(5日)	0.175(29日)	0.250(5日)	0.180(29日)
#366	0.220(1日)	0.095(25日)	0.220(1日)	0.125(29日)
#356	0.160(1日)	0.040(29日)	0.175(5日)	0.040(29日)
#152-#153(5Y)	0.010(1日)	-0.030(29日)	0.040(12日)	-0.030(29日)
#180-#181(20Y)	0.875(1日)	0.810(25日)	0.950(11日)	0.850(29日)
#1087-#1096 TDB(6M)	-0.170(7日)	-0.230(20日)	-0.170(7日)	-0.220(25日)
#1091-#1098 TDB(3M)	-0.140(1日)	-0.175(22日)	-0.135(1日)	-0.143(29日)